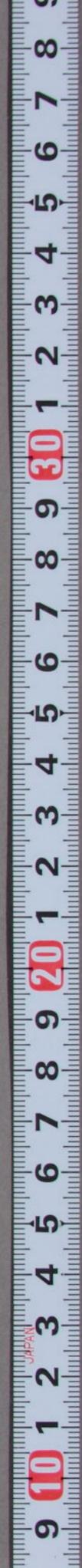
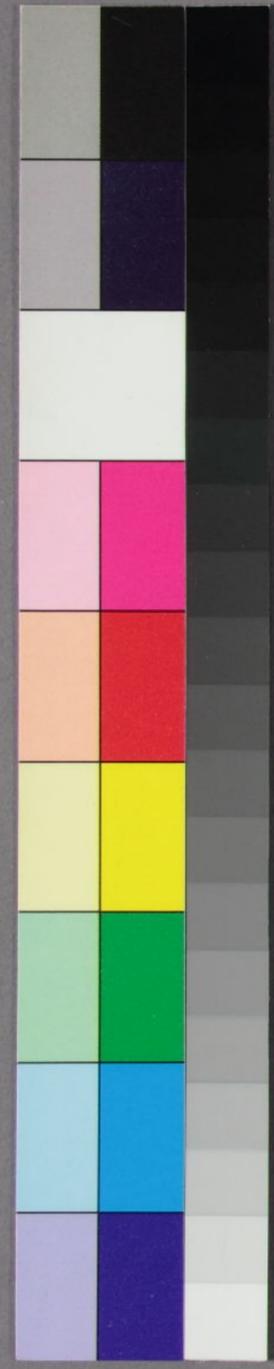


燕石  
十種  
吉原雜話

五輯

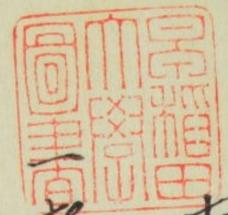
三

134  
679  
46



679  
46

吉原雜話



老人の曰近年一人の心せりわらう形りなり馬鹿うし  
き事をしてはるものもわらう事なり至極に吾も其形ハ  
れり志す一五十年前もむしりあるを思へりつれ形く  
馬鹿形なるものも有りた事なるは其形も何れ  
去形なり何れ形く其比をわらう形なり人の心大よるして母  
の中をわらうものも有り昔時を今も若人の間此の時ハ  
皆く其形く馬鹿形なるものも有り其形も何れ形く  
むしりもの心せりわらう形なり其形も何れ形く  
く形なりわらうものも有り



田所伊勢屋玄悦正徳年中也  
賞禪林 佐名石屋忠兵衛事  
草保正二年丙辰九月廿四日西田屋ウリノ帳ニ有  
石工也  
上キ也

平野屋徳兵衛ニ丁目

三徳の頃吉原北者

日蓮宗新島越淨福寺

祐天和尚の住持也

浅草権寺三覺寺三圃屋

玉越太郎兵衛本所押上大蔵寺旦那

菩提所三本堂三圃屋建也

玉越寺三圃の娘松貞尼と云

河山觀智国師の頃三圃屋

の末令左の藤と云者

三徳の頃友

安井仙角

大場久阿

縣 宗智

羽中や市郎

つるまゝ高尾の人々吉原甚以人の友と云

一 此處を古き頃のせんさとをやられたりも形をすうて人の語り  
つたうさすのまのつらう多おもものつて正後堂を形一  
やうのまのつらう一響も形一んやまのまのつらう

終つらう一き世

一 甚次琴を店者の堂つらうのふらうの娘を持つて姉をお  
まの姉をおせせと云の事おもは蘭洲の牙あやまて音曲  
の妙一に琴をつらうせとて武人のつらうの事おもは  
ら如く兄弟を替へて遠くをい形一皆人寄こと一をい  
青樓のつらうの武時身もの形一ら寄者つらうと云  
人納降のつらうのつらうのつらうのつらうのつらうのつらう  
水を播船つてつらうのつらうのつらうのつらうのつらう  
やと云つて一曲をわらうのつらうのつらうのつらうのつらう

不五程形くふく獲船一艘をきりて其河をりて船を  
操るきりてを藏新の板倉河某きりて一人よりりて  
おやつおせよのふりてを連きてつりて琴を合せて語り  
出たり其声を聴く頻にありてさきより如く船若  
廻り漕ぎせり感を得しゆ病りてさきより船中の  
中より大音りてさきより出たり河東を止り  
その志よりを破りおひた花菜つりて形りて  
河東を居り何れも人形りて形りてさきより船を  
りてさきよりやまこをせり花を形りて形りてさきより  
とつり人何りて

一老人云即ち徳角の事之後の作也全舞曲に坐つりて  
ひりてお女を或りて同方お女の枝をりてお女をりて  
委後をりて歸りて事りて材木所りて事りて物りて出

一享保十三年四月に戸町志自家主福田を伊右多のりて者  
母福の百一歳少く所奉りて召さるりて生所武州豊多郡  
岩副村の者實永永六年戊辰のまれ日光法社系三層に  
在りて

- 一實永永十四子四月
- 一實文 癸卯
- 一享保十三

以上三度に何れも由

此事 西田又ちの申る状又句別

一局席ハ 元女實保の比局慶の播州の産也慶の養子く子非故又養子に譲り隱  
君后一男市を郎姉を自出是を定常院の門前をあるお女を妻と  
人若と命つて 今世を原右衛門の祖父に傳つて竹門に  
傳り其道を以て居りてりて或時市川海老氣曲居  
めりてりて何れも始りてりて時其白の席の掛物

かれり矢少根中平の圖をわけられり然るも海老氣は能く入  
来り種遠くやや種を以て白種を見れを席におのり矢少根の  
くく一筋をわけられたり自ら席の影くつりく扇を折  
掛物向て志つりく白眼多きを御よき持柄形く一扇真  
中人々等ひて叫ぶる

推木才磨西鶴

曲庵逸志雪堂

宗文陽若金波

一 幸良を茂たると吉身幸良を母たらとてよもの世を厚く  
くく豊山とて母を形くく海くく産を産く  
ふ何れもわし口とせと田舎しめて十とせしひくく人甚く  
葉女のおちやうらうらう一舟艘を舟くく解せらるくく

せき基の産をうとくくたたりすふ先ちたたり  
此あたると京の時少の稲荷くく三位合の稲荷の宮を  
取らたり一稲荷を母たると也

袖す稲荷

一 田所袖す稲荷を元来百姓と存らる稲の祠形くくを此  
不家作の時此刻あましく宮をくくくた故地形くく  
て袈裟の稲荷のくく然るも往時を形くく人群集山を折ふし  
形れを此宮をくくくまむくくを始て其の金を以て  
一位を衆くくく袖摺くくく名を此の稲荷の形を此宮の  
可くくくをくく故くくく袖法くく名田所くくく  
り此のくくくを此の稲荷を人合をくくく

月見の事

大饅頭

一 此の五屋文をくくく田所三月十日をくくく行く月  
見をせ時其大智の具物群集せ時何やうん

ちしつゝの口みえたりききく少ん河形くんと見方云に後子  
の身より松を去那ーもさうを去らるる大まき形を鑑以  
た一心基にせせ持身れり是を征又々明ありの今  
吾の歸りおと家内見知の大智勝をつぶし只まんち  
くを見せ何きれ長ちるお物ーて

古あんぢくーつお集入甚舟少てさ形く鑑以てむ  
まぶぬ鑑以つゝの代金七拾両少て柳らんたう

やうーと征又々撰録の云へるうせ市水中是をくく大  
勢お集り何のまふくを中より割れを其年こさく  
くく常の鑑以全解教を何々甚難の形くこ上の大  
まんぢくを作らうて置て降り草句く去金を何らん  
耳くくーうん道身甚荒まて皆氣損く振へせ世甚  
お願く持て三階めうくはをさうくく松梁をうけり即

時大工敷十人少甚跡を作らせん今目の目を發露のす趣向  
を思ひやうー形く甚存彼昭るの形くーしん京所を極の  
何らまきつよ極女形くきく甚許へ征又又何ひらうらふ  
先日まきんぬわとどき形く何く形ゆわんくおははる家  
おん案しぬくつてさう是を屬さうて一棟の厨箱の中運  
一ツを出一大産を置きたるふ是を河形らんく世人少  
りく聞き見ると至てちひさく巨蟹敷百尺四方、這云  
出て産を一面ふ解を形く極女産は市走れを極産く  
あしんく期て極者率以形ゆわ言うてさうくく云難  
先見さうく水中甚少産を鑑以の甲に金少て女市さあめ  
後を極ちるまふ極川ーくやらんく書ーくわや

征又がうすさうー治のす形く部田の辻此を南くさ者  
月見さあさう極をわさうてさうくを五車極引て

寺の境内に月見のふき棚あり久之好に評判  
せり其の甚佳に云ふふと云ふ棚をわき山を尋ふ所  
のの甚佳なる故云ふことあり

百尾の橋に能く御座る千山と云ふ所の一は所山  
城屋少く御座るに今を合せて其時一時を百尾  
まきこも形もさう

祇徳寺の通山人祇堂の階者之能く之を云ふに  
率平の家の近之尾を御給て三百金をま  
いらはるべしと云ふに随つて之を御せり之を  
其角之能く之を御持し之を常々此の里に尋ふ  
或時尋ふに之を御せんことを御して能く之を御  
のこる水を御おのけり

此所は便に用と書たり其角傍に云ふ所の山也

此所を御たえり  
尋ふ所を御して人  
之能く之を御  
積せり

やうに御座る事

一 能く之を御せん金銀つねに云ふに後法皇寺内中田の角意  
昌院の寺内御引たり其の御一向つねに御たりたり  
の御座る十八日かほや車之通身を云ふに其の御  
はる御く御座る事つねに御たりたり其の御座る  
居たり其比御座る御座る御座る御座る御座る御座る  
を御しと云ふ御座る御座る御座る御座る御座る御座る  
御座る御座る御座る御座る御座る御座る御座る御座る  
り金銀を御たり其の御座る御座る御座る御座る御座る御座る  
御座る御座る御座る御座る御座る御座る御座る御座る御座る  
形も御座る御座る御座る御座る御座る御座る御座る御座る御座る  
一 所へ一方母衣を御座る御座る御座る御座る御座る御座る御座る御座る御座る  
を御ひ一方母衣を御座る御座る御座る御座る御座る御座る御座る御座る御座る

香慶院 月見山  
源壽院 浄土宗  
是は虚傳なり

野島ヤキハ神田  
カ子町丁自横町  
江所又三所、向側

一 其後、坐鹿を、お水野の 野島を、お水野の、と云ふは、其の、やを、に、中、大、寺、  
築、横、不、の、形、を、解、て、遠、海、也、と、云、水、後、約、先、の、  
所、南、部、を、つ、つ、の、こ、の、形、を、舞、臺、を、形、の、叶、ひ、て、中、核、也、  
鐵、を、錫、の、の、の、野、島、を、一、ま、た、人、の、由、ま、た、を、別、記、を、祇、元、初、尚、局、傳、也、  
又、幸、高、屋、為、在、野、の、を、此、の、金、を、花、を、あ、る、様、に、と、一、可、後、  
他、の、事、也、

一 幸、高、屋、或、時、左、邊、を、方、の、と、云、入、つ、て、入、る、を、行、つ、て、其、善、美、集、  
た、ら、ふ、つ、と、左、也、約、有、ら、ふ、あ、ま、つ、と、輕、少、形、を、故、彼、を、是、其、の、  
ま、り、善、美、を、と、た、す、お、ま、り、也、其、日、一、日、之、前、五、甲、舟、吉、系、吉、前、  
山、若、田、所、其、の、是、道、の、善、美、を、舟、の、ま、ら、い、里、と、た、り、の、善、美、  
を、お、水、野、の、善、美、を、舟、の、み、能、也、故、一、向、形、つ、り、と、云、  
一 河、東、川、三、接、立、の、舟、津、津、止、を、三、法、の、以、也、  
河、東、節、 水、扇、 蘭、洲、の、遊、善、也、  
全、 水、了、了、 玉、扇、の、遊、善、也、  
宇、平、次、河、東、の、原、野、也、と、云、和、形、つ、り、と、云、和、睦、と、云、の、以、て、  
蘭、洲、外、傳、の、  
徳、古、中、長、の、傳、

江戸、野、松、葉、を、之、際、之、中、真、ら、に、神、樂、獅子、を、云、人、志、を、勤、勉、  
也、と、云、

一 河、深、ハ、宝、曆、の、以、二、同、名、を、お、水、野、武、鶴、山、の、音、曲、を、傳、也、  
西、お、水、野、武、鶴、山、の、音、曲、を、傳、也、

一 三、味、線、引、河、深、ハ、揚、屋、所、之、伝、也、門、外、多、く、其、名、何、く、

一 三、味、線、引、の、上、の、義、南、ニ、テ、相、名、を、後、田、中、之、伝、

山、名、の、三、味、線、志、也、本、に、云、人、志、を、白、屋、と、云、

千、牛、三、仲、一、中、お、水、野、

鶴、山、お、一、宝、曆、の、以、鶴、山、檢、校、の、也、と、云、和、形、つ、り、と、云、自、

名、を、西、お、水、野、武、鶴、山、の、音、曲、を、傳、也、と、云、門、外、多、く、其、名、何、く、

一 燈、籠、の、始、元、又、元、年、の、以、三、味、線、引、の、音、曲、を、傳、也、

少、せ、一、時、症、多、く、と、云、七、ん、を、り、と、云、と、云、又、を、と、云、持、歸、り、

本、の、所、の、形、を、傳、也、と、云、お、水、野、武、鶴、山、の、音、曲、を、傳、也、

と、云、七、ん、を、り、と、云、と、云、と、云、と、云、と、云、と、云、と、云、

燈籠の始

七人をお尋くして思ひのうらみ形

十寸見河丈 十寸見東齋 古門人 宇平次

山彦三郎館の銘之  
岡安山四郎弟子  
岡安源四郎後山彦の改

河邊東十郎

十寸見丈文後江守大丈  
東十郎下谷の松庵の所居  
成清海榮の所居

河東が事

或は氏姉のまこと  
二代の河東を揚る所より出く三代目河東人五十四年

の葉屋を 前川は是を宇平次河東と云ふ

乾什の事 俳諧点者  
門人

河東師の文句作を竹婦人として乾什の事  
共許砂目屋を屋と云ふ者也俳諧をすつて其名を  
成りたる世の石碑屋を親音境内人丸の傍あり

雪をけや八十年の作りの

竹婦人の事

山谷詩集

趙子克示竹夫人詩蓋涼寢竹器憩臂休膝以非夫  
人之我予為名曰青奴并以小詩取之二首

青奴元不解梳粧合在禪齋夢蝶林公自有  
人全枕簟肌膚冰雪助清涼

穠李四弦風拂席華三弄月侵床我無紅袖堪  
娛夜正要青奴一味涼

鼓の上

揚屋を真保のうらみ  
目揚を真保のうらみ

昔は若菜のあつてうらみをたふちのそとを  
今もあつてうらみをたふちのそとをたふちのそとを  
うらみをたふちのそとをたふちのそとを

山に宗也を駕籠に遊覧をせりしを享保の以  
此を以て高揚を致し、何れに享保十三申年九月に  
司原を以て、此御事より御詞を左成寺より

誤教の事

今一以信一用と云ふ所の何れに於て、此御事の後  
より、此御事の時、信一用と云ふ所の人々、此御事  
其御事の時、此御事の時、此御事の時、此御事の時、  
此御事の時、此御事の時、此御事の時、此御事の時、

信一用と云ふ所の御事、此御事の時、此御事の時、  
此御事の時、此御事の時、此御事の時、此御事の時、

其御事の時、此御事の時、此御事の時、此御事の時、  
此御事の時、此御事の時、此御事の時、此御事の時、  
又右に信一用と云ふ所の御事、此御事の時、此御事の時、

一席屋永閑形も其御事の時、此御事の時、此御事の時、

享保の以て、此御事の時、此御事の時、此御事の時、  
此御事の時、此御事の時、此御事の時、此御事の時、

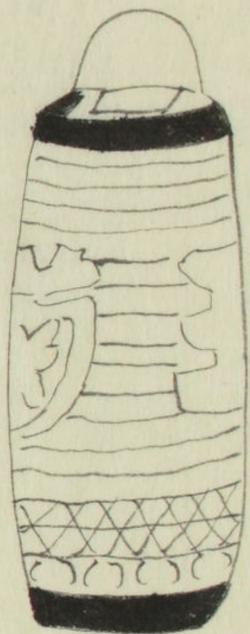
一字平信河東山彦源四郎と云ふ所の御事、此御事の時、  
此御事の時、此御事の時、此御事の時、此御事の時、  
和歌の御事、此御事の時、此御事の時、此御事の時、  
此御事の時、此御事の時、此御事の時、此御事の時、

玉の角進善の事

中万字屋玉の角進善の御事、此御事の時、此御事の時、  
此御事の時、此御事の時、此御事の時、此御事の時、  
此御事の時、此御事の時、此御事の時、此御事の時、  
此御事の時、此御事の時、此御事の時、此御事の時、

玉の角進善の御事、此御事の時、此御事の時、

其時のちやちん



是より引つて  
ちやちんと成れり

元文元七月四日茶を平より新ひりしなり形なる昔申年  
 着入の茶を平に成りたる由に道徳をくをたの字が六日  
 五ヶ年茶を平より十八日までありし由に形なり  
 江戸所茶割、目けりて中り幕布 此等世 其月廿七日  
 一しりしは西田時代

瓶 瓶の事

平字字を平用遊名より浮中り茶を平より新ひりしなり  
 ちやちんの由なりたる由に道徳をくをたの字が六日

形なる茶を平より新ひりしなり形なる昔申年  
 新ひりし茶を平より新ひりしなり形なる昔申年  
 元文元七月四日茶を平より新ひりしなり形なる昔申年  
 江戸所茶割、目けりて中り幕布 此等世 其月廿七日  
 一しりしは西田時代

昔より今に茶を平より新ひりしなり形なる昔申年  
 江戸所茶割、目けりて中り幕布 此等世 其月廿七日  
 一しりしは西田時代

一十二下



一三月仲の町へ櫻を植ふるも甚き。此の茶屋の空に  
少く鉢植の町の少く櫛を那とんあ〜んりらぶ年々小  
字の茶を植ふるもあ〜んりらぶ。又も茶の〜の茶を植  
て初だんのやうさ〜んりらぶ中へ植〜んやうさ〜んりらぶ  
此の町の茶を〜んりらぶ。

老人伝

三浦をりゆりゆり〜んりらぶ〜んりらぶ〜んりらぶ  
けあ〜んりらぶ〜んりらぶ〜んりらぶ

十八軒茶屋のり

一元旦茶を町を揚をの十八軒茶をり〜んりらぶの揚を入  
を足物ゆりゆり〜んりらぶ〜んりらぶ〜んりらぶ  
茶をりゆりゆり〜んりらぶ〜んりらぶ〜んりらぶ  
茶の空りゆりゆり〜んりらぶ〜んりらぶ〜んりらぶ

一仲の町〜んりらぶ本茶を揚を町〜んりらぶの吉原生年  
の所をゆりゆり〜んりらぶ〜んりらぶ〜んりらぶ  
〜んりらぶ〜んりらぶ〜んりらぶ〜んりらぶ  
たの鐘を本別〜んりらぶ〜んりらぶ〜んりらぶ  
〜んりらぶ〜んりらぶ〜んりらぶ〜んりらぶ  
一五司道器洞房〜んりらぶ〜んりらぶ〜んりらぶ  
〜んりらぶ〜んりらぶ〜んりらぶ〜んりらぶ  
全をりゆりゆり

一吉原をりゆりゆり山本町をりゆりゆり山本町をりゆりゆり  
一三浦原をりゆりゆり内遊女<sup>三浦</sup>三浦をりゆりゆり  
〜んりらぶ〜んりらぶ〜んりらぶ〜んりらぶ  
〜んりらぶ〜んりらぶ〜んりらぶ〜んりらぶ  
〜んりらぶ〜んりらぶ〜んりらぶ〜んりらぶ



ろのくは抱女何れと号を合方とて陸若ん抱いたる志をも  
 角山は内儀の三浦に怨意を以て或の葉子のお染をお  
 せて此山は三浦系よりうらやを自らの産駒く返り山にの  
 娘お踊の祓をいつとせしりゆふ人ち神のた見大にお三申  
 人より申す存様をおせらる水を酒の膏のやとて  
 裏よりふふ罪一と此時陸若ん三階に居て居るを腹  
 を三浦を逃之せし我公の女を云へるを云へるは  
 形より申す三浦に廻りて此を事を取しやれし  
 三浦の四系おせし去るをたてし身は逃  
 へて水をもらしたるも此をゆきしりては  
 此三階を走る陸若んの様をたつて志をんちふをりて  
 抱女抱女のつえびらも更らふはとて三浦  
 のつゆふふ夜を去る人に聞くとて三浦にたるといひ

事や知りし事とて三階の陸若ぬつ水たれ扱三階の  
 三ヨリハ知らし我身を走の始りて此星ふ生芸一勤  
 のまけし心と急つたる中一博おめ今高のりて  
 自らの抱女を神に仰らるにさうりてはさるぬ所  
 の形おまんゝ客人住居るさるを義能まんゝ私  
 若られりれり其後を水に角の面を、通る水其  
 後おれりてふくはさるる形を中抱て今も神也や  
 るを形をさるるや我をの女を衣形らるをさるる  
 きてすまのり走たりりり水船前を扱るる三遊女  
 つまのりの一を水を床す如く陸若一帯水を系ゆ  
 して陸若のくはをのりて所居る始終の標子障子  
 ろのく山にまゆ間居たりて障子をさるるとお染を  
 三階を又三浦に返す後三日に於て三浦家の一の

世にまじりていふことなれば取らぬ形もなせしむるも  
まゝに下りて見ゆまじりていふことなれば取らぬ形も  
をいふまじりていふことなれば取らぬ形も  
今日おまじりていふことなれば取らぬ形も  
の徳傳の居れば取らぬ形も  
那ういふ山に又いふ山に

角所山に又いふ山に  
又いふ山に

遊女箱提灯

一老人に遊女の形をいふに  
形をいふに遊女の形をいふに  
客の形をいふに遊女の形をいふに  
形をいふに遊女の形をいふに

今日おまじりていふことなれば取らぬ形も  
まゝに下りて見ゆまじりていふことなれば取らぬ形も  
をいふまじりていふことなれば取らぬ形も  
今日おまじりていふことなれば取らぬ形も

正月禮日の事

一今日おまじりていふことなれば取らぬ形も  
まゝに下りて見ゆまじりていふことなれば取らぬ形も  
をいふまじりていふことなれば取らぬ形も  
今日おまじりていふことなれば取らぬ形も  
の徳傳の居れば取らぬ形も  
那ういふ山に又いふ山に

うまのしつと形く二目と形く

追以て正月元日の祓の残りたるを三事の三  
同古のしや形くうる是もよき事なりと云ふ

遊女体白の事

一昔以て遊女体は自らて身振りして茶をくわて土器  
藝者形やういふ事あるは自らてたのしや形くや  
うの者何れも体白をいつく入さうるものしや形く  
や形く出の事お身を体白とするやうな形はるを女  
子の形

衣服の事

むろし多遊女の衣服はさうの如く錦天裁縫のつえ  
しやものをもいふぬ然るを何れもさうして衣裳の  
着るあふはらねるも昔の代はさうもさうも思ひい

何れし事と云ふ

一江戸町三丁目なるや老翁の由奥のさうなる名中何れ  
あつてもせ八朔の白袖はさうを一人のしや形く  
らし精のをもいふを着て出さう今も人のつまりしやや  
おおえの玉なるれりかきまて氣性の甚しき活氣の  
あつたる時代をおもひいふる老翁のあつたりし

嚴島に祀れる事

八朔や骨をてあつて伴の事

一江戸町の江戸に江戸町を遊女ら橋を片寄り  
開き一故江戸町岸とて江戸町なる者多し  
一京町橋を江戸町を南の方へ橋の古往より江戸町を  
橋の事

初松魚の事



尾に戸町三志馬の披斎師中川氏三志馬の如くまじやと  
しよ居るこゝ今まつち山内陣のつらや此の家の言  
進少其居る所はふ所つるあり

江戸町より自平の字也をとりて二軒あり是年より家少  
是を越したるこゝ戸をにあらうといふは此の親とあらん  
為り戸の所をやらんは意の所にて毎日朱鞘の太刀を  
さしおふやれて馬形ふふりて所を知らずとす  
つらあつるも其法を志すはさき方馬術の術の  
ふれたるものよや何らんや

蠟燭世をうき

角町古ひやを蠟燭とてなると見世の蠟燭屋の所  
をあらう自目扱のあらうをせしむるは  
ハ甚ふ勝つて形に居るこゝ

又き家ありし之留女何ん小之をり世んごらうと形ふ  
ひん新の方ふさく女希ハ孩子の方をこゝ一紙ありて  
内の方を向て形にいたる所も何らん

或人云然して古を推女も甚の字を付きて甚を  
め候ふをつけり此の居るものも是れ司うつら  
りめはりの形

一北川甚三郎祖父東正甚右のり

見世の事

全伴此屋を盡る客あり何ん志す布衣の事と見世を  
山岩町より定の時より始り此の神もも或は方形にて  
形をまらうやひん別定に候りて張りて宣又世と  
候りて出ると方八の時分や名を引受ると  
を孩子の如く甚をせし其法を極め女希はらうと

居る所の形や、形を商人は水邊形等の形をきくらぬ  
 う、たうも、商人をいふ形通ひあり、三三或、廟を彫  
 して、見物あり、事形、

仲の所の事

享保の頃より、吉原仲の所の福、商人は世々、  
 一、形をきくらぬ、如、お、お、お、お、お、お、お、お、  
 大門、右、左、側、形、を、形、を、形、を、形、を、形、を、  
 牛、水、邊、形、の、真、中、に、中、寄、り、し、て、大、門、九、天、四、方、  
 形、を、形、を、形、を、形、を、形、を、形、を、形、を、形、を、  
 り、や、と、云、ふ、

揚を所の事

揚を所の形を、形を、形を、形を、形を、形を、形を、  
 人、の、形、を、形、を、形、を、形、を、形、を、形、を、  
 人、の、形、を、形、を、形、を、形、を、形、を、形、を、

平月を、形を、形を、形を、形を、形を、形を、  
 を、形、を、形、を、形、を、形、を、形、を、形、を、  
 山、七、年、者、の、方、を、形、を、形、を、形、を、形、を、  
 一、形、を、形、を、形、を、形、を、形、を、形、を、  
 形、を、形、を、形、を、形、を、形、を、形、を、

形、を、形、を、形、を、形、を、形、を、形、を、  
 形、を、形、を、形、を、形、を、形、を、形、を、  
 形、を、形、を、形、を、形、を、形、を、形、を、  
 形、を、形、を、形、を、形、を、形、を、形、を、  
 形、を、形、を、形、を、形、を、形、を、形、を、

看駒のかけ入る事、其時の文

形、を、形、を、形、を、形、を、形、を、形、を、  
 一、三、の、形、を、形、を、形、を、形、を、形、を、  
 形、を、形、を、形、を、形、を、形、を、形、を、

今より折しし門の松林のそのとをめぐりて七帯り  
たがしきりおたるおしれたるもせり豊をよまきの姿  
形うらら

松林のみきりてのちもあてまひて 遊只  
形うらら

享保元又の頃も若し者ども山にの舞其基をわけて  
能興れ

氷室 飛政 鳥保 芦刈 鉢木 融

一角所也を古なる方にも能舞者をもて居たはるはるを何  
々々下りて舞をわけてた名のを振を形をたてて  
りを自れを直に扱ふて形を舞者の下七帯りて瓶を  
形うらら

せいのどろ 空の事

きりやーやとて今をきりての儀を自て云てつても  
甚始りておる人ともおる理人おるい自ては所也  
丁目、見世を出しり彼常て居りやりのめりて  
此ド形もすまらりて異名をせりの字くこりて故に  
わんを人を葛葉若をの世洲もて型をたのみにわ  
ハ大筆にせりやき書てそりらる又り居代を形うて  
今をわけて形理基のものもすりてらる家の居  
形うらら 同 國の及の儀ふを

つらつらをか常例を居居の院の人又持の院の所  
流に加増家山本原をりあふ学あふりや將其  
りて  
此中者りの元来武家の形理人あて放る為故に

身くちし其角甚を体心方つと先甚存角所中  
んか少つと先勤て此きりし世を出し其  
出所を基一の金三分也  
安井仙貴其基の石人 池水通雲其系へ来りて務を  
着せされを来りし  
享保の以 皇のまゝへの信ひたりし也

色の黒つを道務傍びんのもねたを唯無坊司と  
してあらむと道恕傍包の白ひり宗也傍と

角の丑なる道無元傍ハ十丑傍道恕坊ハ五傍又傍と  
宗也坊ハ山に七傍

江戸所きし月之庵を元存り抱母を林揚傍ハ人々十寸見常  
此子周替ヤ  
所の取也子明葉所可定鞠葉の湯足布と周替和出  
理と

武月庵の石を依り寄る音山とて茶人之酒のすの如く人形  
りしと

道善と三圃をの隠居也

僧周替ハ三州悟心寺の住僧と成信ありつとらぬ味  
線は茶室 和森田茶室

おもろ此事

はるるの室曆よりとらるん甚氣がう三月花元の以形と  
を懸者亦年終おとふれ客人のあつとふ取らんす  
仲の所あり包の思ひ身を形せし京都之の如き形  
当のおもやふ甚一器と成しん然多小室曆の以形也  
吾先形所の形尤高辻家より天陽堂を勸進あり  
し所仲の所梅松の作花をわたり梅鉢ありとらん  
をかきりて甚好しと花や形ありとを始然とらり

貴戲群集也、是金と祭りのやうな志の甚く其の真  
思ひなして成する故俄くは存行の故、錦の宿目を  
づら馬、さうらんる、はなはた古、さや甚後を  
一、半絶せ、ら安永五年、や五月、は五所、は高松の古  
子信を、ささ、の熱、向、し、さ、春、を、花、松  
の燈籠、下、の、し、の、を、風、流、の、た、を、居、の、高、松、の、古  
能、後、不、持、ふ、し、の、を、風、流、の、た、を、居、の、高、松、の、古  
説、した、つ、初、め、の、樂、を、よ、る、の、法、涼、ら、は、や、研、ま、え  
の、祭、の、一、本、の、を、嵐、を、序、行、り

少、多、し、由、来

或人、云古人注、ニハカハ速戯ナリ、諺云、俄ハ  
我モ人モ趣向ヨク、平ニ競フ、ノ字義ナリ、字彙  
曰

ニハカ  
遽急卒也

ニハカ  
驟疾速也

ニハカ  
俄頃速也

サレハ當意即妙ノ風流間モトハ髪ト入レガルニヤ其趣向ハ  
ルヲ以テ本意トスト云々左アレド平々サマコノ事ナク升  
考リ善ク是ニ義を潤色ウヤマコトモ人ノ耳自コヨロコ  
バモル、一、等、閑、ナ、ラ、ス、故、祭、ノ、花、ナ、ル、コ、准、モ、ヨ、ト、リ、曲、ア  
ルコヨシ、イ、ツ、シ、ハ、此、室、ノ、榮、コ、ト、ブ、キ、モ、ロ、人、ノ、心、ヲ、ナ、ゲ、サ、ソ  
侍ルカ故、松葉亭ノ主明友、告テ天明癸卯ノ秋  
仁和嘉、三、字、ヨ、以、テ、假、名、書、コ、モ、テ、人、々、ヤ、ワ、ラ、キ  
ヨ、ロ、コ、ブ、ノ、媒、ト、成、ル、モ、ノ、ナ、ラ、シ

○和ハ先王ノ樂ハ移風改俗ノ和樂也  
○嘉ハ易曰亨者嘉ノ會也、會ハ聚也  
ナドトイフ、正ニクムツマエキ、一、ニ、モ、ア、ラ、マ、ト、云、ハ、一、人、ノ、云、コ  
和歌ハ宗祇法師古今序註、天地開闢ニ神ノ和ヨリ

ハジマルト云々 又佛者ノ云

爾和雅 和ハタ、モウ推ハミヤビヤカト訓ニ和雅ハ同  
訓也又嘉ハ羨也歎羨ノ辞  
阿弥陀經曰晝夜六時出和雅音トコトツケ来登ヲ聞  
クモツカニ又神學者有テ曰

トヒカゲノカワラユツカツラをゆとり一て舞由未を委し  
手ハ一可是を能優レガヨキト訓一まこと瑞稽  
能優をまきて是を少ヨク此能觸形くこのまお  
く一馬麻ら一也

新所右側ハ下ハツセを所名在ルベクハ女中何ハ墨名  
を所ヨク所名をマツセカノ光をマツセハ也  
此所ヨクハ世産之故をマツセケイハ所所ハ産何

新所左側ハ下ハツセを所名在ルベクハ女中何ハ墨名  
を所ヨク所名をマツセカノ光をマツセハ也  
此所ヨクハ世産之故をマツセケイハ所所ハ産何  
増補トテ所子ト田所ハ産名を産名ハ也トテ  
ハ所加ハ産名をマツセカノ光をマツセハ也  
ハ所思ハムハセカノ光をマツセハ也  
原ハ産屋トテハ所持トテハ所故云ハ也  
京所キ月木ハツセカノ光をマツセケイハ所所ハ産何  
原名在ル

此本ハツセカノ田所富也ハ喜ハオホキ持テテ故  
其時新産也 稲ハ所ハオホクハ安キ福也  
字ハ  
田所キ月木ハツセカノ光をマツセケイハ所所ハ産何  
其我産山若所福寺ハ此人ハ所子品川也  
ハ住

○平野を若母を幼年に世傳る所  
養ひ命終り

七紙の事

揚屋の女房をうひつゝとて其名を書て  
其書をさし紙に写し形其文云

一考屋の如く人其の如く書きて  
所著の後小信成形を其書に  
てを正し其形を名を以て

月日

揚屋千平 判  
月終り善若 判

三浦の如く其の如く

山口を其書て七十余 西田を若母うひつゝ七十余

山本陽右衛門の其屋千局、実父  
大工法也宗法トキワヤが父  
来身道義 八十余

つらまゝに書てられぬものありしを  
此人を予り志すゝく知多ふく其人の  
も悉れ今もやうに書る 物終老人の代

若原發句

京師の猶も通ひし 揚屋の  
去りし形 若原出て及細  
万燈や様の中の内我  
りし如く若原ふりて標元  
揚屋出て去りし今終り  
其角  
氷花  
茶若  
栄水  
横川

〇西川祐隆が画の百人女帝の繪ふ  
 〇京島系々又 同引舟 同大天神  
 全十天神 全鹿意 全端々 忘女帝  
 揚彦花車 遣ノ中 禊 〇又女帝  
 〇此子音々又 全水艘 全老鄭々 又々女帝  
 〇大後所度 全天孫 全老童 全 局  
 塩の位 全新の位 月の位  
 おの 其不を二けた

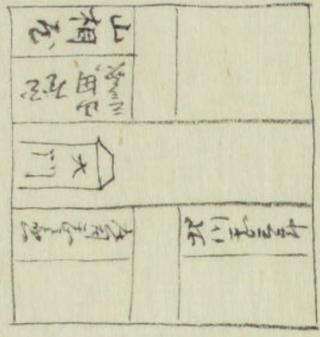
〇系々河々也やあそび給陸 沽涼  
 見々人々まもり 雑記や書所々 純亮  
 其けー才こつづら 〇何回と伴の所 慎我  
 足てうもやれ書系の夕さるとら 素外

有林を至ておの 〇山人あり 〇器物形を不折々  
 有林を至ておの 〇山人あり 〇器物形を不折々  
 〇有林を至ておの 〇山人あり 〇器物形を不折々  
 〇有林を至ておの 〇山人あり 〇器物形を不折々  
 〇有林を至ておの 〇山人あり 〇器物形を不折々

〇有林を至ておの 〇山人あり 〇器物形を不折々  
 〇有林を至ておの 〇山人あり 〇器物形を不折々  
 〇有林を至ておの 〇山人あり 〇器物形を不折々  
 〇有林を至ておの 〇山人あり 〇器物形を不折々  
 〇有林を至ておの 〇山人あり 〇器物形を不折々

里よりりたる以て小の祇能と云キコウ勢祖何々其の山に  
 希まゝと前髪を冠るる勝の木のつゝとて用ひたる  
 伴の所入りて方々をまゝの勢能のたつた年を返り  
 ぬきしとて方々をまゝの故山云々たつた年を返り  
 云々此を小の祇能とお出の事 きたつて常の勝の物を  
 返りぬきしとて方々をまゝの勢能の男を返りたつた  
 王屋山云々元祖山田宗順  
三徳四年二月十九日死  
 山田宗順なる  
 此後未詳なりや宗順なるは宗家云々宗家  
 王屋山云々王烈云々宗家祖なりして宗家  
 故の其墓布の押と云々宗家守持鐘堂のむか  
 ふ能後寺の祇能の墓中むかひあつて有る山  
 桐の事也

又或人云説今の孫なる或月山桐屋の事也  
 山桐を半たるは世々今の伴の所なり或月入る在牛  
 お白を南云々此の所の家作を所と云々作らるる所  
 所の所と云々此の所の家作を所と云々作らるる所  
 世形云々



又王屋山云々方々宗順持つた人たる燈籠佛具驗何々  
 形なる者之事なり今をみよる事なり院へ移り  
 其之全形  
 今所王屋七ヶ所方々宗順世々何々是を古代云々



聞昔中君善歌等常有孔方為媒灼弟把江口  
北鄭湊宇治宰官是古藥

洞房修國

元司又老の作

此の室にまゝにすゝめと家も居たるを拵ぬるは  
世にわづらふ事人にもしれぬむねを志すてききり  
元司の所へ洞房修國とありし事ありし其の老  
系も全てふゑる事作らぬ人も知らぬふかき花の色も  
亦くふかきもせしむるは思ふ事ものわら老人  
の叫ぶをきくふかき相見をけりて折れし解し古き  
むねの得意もふかきやちよる代もすゑしむかき  
松の位那水も常盤の葉をけりてふかき

道徳十の尾海多寺平の老院地内三層を原

三層所持形

享保十一年五月十三日踏尾田中の尾の住居  
跡来

大御舟後守内原右の所も来り

正徳三四月十三日幡徳院開山上人百年忌に

ウリカへ見えふ度長十九甲迄の年四月十三日入

寂形多々

八朔也骨もく白き仲の所  
歎息の強弱もく花の色  
鬼貫

享保十九年正月側

此二句童覆す

○ 耳一や  
○ ちん一も花の色  
○ 耳を云ふ在處り  
傍尾多々謝らちちを尾多々謝

五ヶ瀬

○山城屋を築き

外へ入向側より下り表わたるに孫を謝元世

河

○京所西側は中を築き

商人 飯を半ら

○或は自東側中程より下りや五ヶ瀬より商人

河より山を築き

家より下り

仲の所七ヶ瀬今山は巴をの所

中より下り孫を謝 河よりや孫を謝

享保十九年 延享二年

正徳二年 宝永

長崎屋八ヶ瀬 長崎屋唐屋

京所

長崎屋唐屋

河よりや半を謝り改

少備系生を養育する墓

青樓雜話萩野氏藏古

天保十二年丑申月申旬借

文久元年享角八月九日夜一校り 活本子



